

(様式第4号)

上田市交流文化芸術センター運営検証委員会 会議概要

1 審議会名	上田市交流文化芸術センター運営検証委員会
2 日時	令和元年10月30日 午後2時00分から午後4時5分まで
3 会場	上田市交流文化芸術センター大ホールホワイエ
4 出席者	今井裕委員、荻原康子委員、関和幸委員、 竹田貴一委員、吉本光宏委員、渡辺弘委員
5 市側出席者	柳原政策企画部長、津村館長、久保田副館長、清水上田市立美術館長 小澤プロデューサー、堀内総務係長、掛川広報等係長
6 公開・非公開	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 ・ <input type="checkbox"/> 一部公開 ・ <input type="checkbox"/> 非公開
7 傍聴者	3人 記者 3人
8 会議概要作成年月日	令和元年10月30日

協議事項等

1 開 会 (久保田副館長)
2 協議事項
(1) 基本理念と自主事業について
(館長) 資料の説明は後ほど副館長から行うが、その前に、館長として一言お話をさせていただきたい。計画の最終段階、運営管理検討委員会で答申されるときになるが、県内で県立ホールが唯一ないこの東信地区で、県と一緒に事業ができ、かつ全国に認知されるホールを目指すということが一つのミッションとして追加された。そのために、計画段階を超える事業数やスタッフ数となっていることを事前にお伝えしたい。そういった形で開館をして5年運営をさせていただいて来たが、今回の検討委員会においてはそのことの是非を、このままでよいのか、それともそんなことはしなくてよい、地方の一市民会館としての運営でよいのか、これは極論になるが、その点についても検討いただきたい。
・資料に沿い久保田副館長から概要を説明
・以降、協議
(委員) 資料の維持管理費、当初計画との差引欄のプラスマイナスがほかの欄と逆ではないか。
(事務局) 他の欄に合わせ訂正する。
(委員) 先ほど、当初計画を超える事業で3年間やってきた、その是非について検討をという話があったが、事業費が大幅に増えていることを指していると思うが、その議論には当初計画の内容と、それをを超えるミッションにしたことの内容・考え方の比較をした資料が出てこない、という違いがあって、その是非の議論は口頭だけではやりにくい。
(事務局) 了承。
(委員) この資料で一番課題と思うのは、事業収入が計画と比べて大幅に減額になっているということ。総額だけの比較だとどうしてもわからないので、当初の計画はどのような積算で、実際はどのような積算でこの収入金額になったのか、差異の分析をしないとそこにどのような課題があるのかが読み切れない。ただし、一言でいうと事業収入が伸びていないのがこの間の大きな運営上の課題となっている。3年間ミッションを超えて事業をやってきたといってもむしろその方がマイナスは増え、事業収入が減額になっている。それだけの事業をやりながら、効果が収入に反映されていないと、単純に言うとならぬか。その辺を再分析してみないとわからないので、ここももう少し細かな資料が欲しい。
(事務局) 単純に言うとならぬか、その時点でやらないといけない事業がかなりある。その辺をお示ししていきたい。当初計画と最も異なるのがこのあたりの考え方。
(委員) 地域文化醸成事業の数字が計画とかなり違っているのは、方針を現実に合わせたやり方をして事業を行っているということでしょうか。
(事務局) 当初計画の出前コンサート、アウトリーチが年3回というのは、1回をどう数えるとい

う問題もある。市内全校に1回アウトリーチを行うと、25校あれば25回と数えられる。特に今の時代の中で、学校に対してのアウトリーチは必須の事業で、特定の学校だけでなく全校にアウトリーチを行いたいと開館以来続けてきている。当初は実施数というよりも、やろうということが優先されていた。具体的に実施するにあたり、全校に対して行うと様に方針に大幅に変えている。これに関しては助成金を充て、地域みなさんに音楽を中心として届けていく事業とし、全小学校5年生でクラス単位のコンサートを実施した後に、当初はなかったが、合併した地域を中心とした9公民館でコンサートを行うという少し大きな事業としたので回数が増えている。

(委員) 子どもたちや人材育成に向けて大きく舵をすごくはっきり切ったとポイントだと思う、当初の計画からみるとずいぶんと思切った、やろうと思ってもなかなか全校でという決断は難しい。最初からこうされたのはすごいこと、その分経費が掛かっているというのはあるかと思う。当初計画とこういう風に違うがこれは必要なんだという資料は欲しい。

(事務局) 了承。

(委員) いろいろな費用が当初の計画と異なって、例えば交流文化スポーツ課で対応とか振り分けられているので、単純な比較は難しいと理解している。この館が育成に力を入れていることで、例えば全校へのアウトリーチを継続して行っているという、墨田区でも行っているが、墨田区と比べて上田の広い面積のところで行っているのは大変なことだと思う。

(委員) 例えば平成30年度で見ると維持管理費は当初計画よりも2千万円弱少なく、事業費は当初予定より3千万位多くかかっている、維持管理費と事業費を合わせると、当初計画より1千万円余計にかかっている。平成28年でいうと、維持管理費は8千2百万円、事業費は4千4百万円オーバー、合算すると4千万円計画より少なくなっているということによいか。

(事務局) 各事業で収支を別個で出しているので、合算すれば確かにそういうことになる。

(委員) 館全体でかかっている経費として、維持管理を合わせると当初予定よりも支出が少なくて済んでいる年がある。

(委員) 今の話は、あくまでもこの表だけの話で、そのほかに一般会計からの繰り入れがあるかどうか。当初から30年度までの市から一般会計から繰り入れている数字はいくらで、当初と比較してどうかという資料は出せないか。

(事務局) 前回資料6に平成30年度単年度の決算見込みの数値と長野、松本と当初計画の比較を提示してあるが、経年資料を次回改めて提出する。

(委員) その時に美術館と両方絡むのでその違いも出さないと他の施設との比較が難しい。

(事務局) 先ほど説明した光熱水費などは美術館の経費も含めたものになっている。事業費は含まれていない。一体の建物のため維持管理費を分けるのは難しい。

(委員) サポーターの数がほとんど伸びていない、この伸びていない数字の中に果たして市民との関わり、地域との関わりの中なかで、事業全体がどうなのかということも何となくその一面が出ている気がする。もし市民が盛り上げようとなると、サポーターの数が伸びてくるのではないか。

(事務局) 他施設の多くの友の会は、会員に情報を提供したり何らかのメリットがあるという会員で、その運営はどれも厳しい状況になっているところが多い。私どものサポーターはあくまでもボランティアで事業のお手伝いに参加していただく組織。ホール公演のチラシの折り込みやふれあい事業の中の公民館や施設でのコンサート運営などのサポートをお願いしている。人数的に伸びていないのは事実だが広報等で募集を行い、活動内容に賛同いただいた方に参加いただいている。

友の会の方のチケット販売はネット販売が中心となる。サポーターの登録数は、施設利用の中心メンバーが多く登録いただいております、ボランティアやサポーターを沢山登録いただくと、これだけのスタッフ数でその方々をすべて包み込むのは不可能になるので、これぐらいの人数が適正ということで活動している。実際に関わっている人数は実は増えているが、登録という形をとって人数を増やすとかえってご迷惑がかかることもある。ただ、

委員のおっしゃる見え方も確かにあるので、そこは検討させていただきたい。

(委員) サポーターとは別に組織があるということか。

(事務局) サポーターの周りにお手伝いしていただける方がいらっしゃるが、その方々を全部サポーターに入ると我々の目が行き届かなくなることがあるので、中心となっている方がその周囲の方をフォローしていただきながら活動を行っている。我々と一緒に議論できるかたがたの人数と考えている。

(委員) 会議に出ていただける人数で、会議には出ないが手伝っていただける人もいると。

(事務局) 劇作家大会では百人を超える方々にお手伝いいただいている。この方々を全員サポーターにしようとするとう我々の目が届かなくなり、逆効果にもなりかねないので、市民同士で活動を行っていただくようにしている。33人の中でも中心的になる人数はもう少し少なくなり、その方々に声をかけていただいている。

インターネットのチケット販売の会員数は、平成30年度末で15,000人弱ぐらいの数になっている。年間で2・3千人ずつ会員数が増えている状況。友の会はチケットの情報会員の要素が強く、ある意味で友の会とニアリーイコールなのが今の数字。

(委員) 有効に組織化していった方がよい。随時募集して、一定の講座を行って終了したら活動できるようなやり方かどうか。

(事務局) 参考にする。

(委員) アーツスタッフアカデミーの30年度は未実施となっているが、理由は。

(事務局) 助成金が不採択になったため未実施となった。

(委員) オーケストラが年間3公演で、2公演が同じオーケストラになっている。集客の傾向など、状況はどうか。

(事務局) 大ホール1,500席のキャパシティからするとなかなか厳しい状況は続いているが、一方でこの夏の群馬交響楽団の公演はソリストが直前にテレビでブレイクした影響で集客が増えたり、一喜一憂といった状況。アナリーゼワークショップの開催や群馬交響楽団と連携して、上田定期演奏会という形にし、楽団員との交流が深まり楽団員の顔が見えることによる、固定観客が増えている実感をしている。

(委員) NHK交響楽団もやっているが。

(事務局) 2回行って、柿落しの時は満席、2回目は若干減るという傾向。

(委員) どこもクラシックはなかなか厳しい。

(事務局) 全国的なクラシックの傾向だが、特殊な指揮者、珍しい楽曲などの時はお客様が入るが、そうでないときは苦戦をしているところが多い。日本全体としてそれをどう支えるのかということ、文化庁から助成金をいただきながらどう支えるのかということ。これも当初の計画にあることだが、定期演奏会のできるぐらいのものにという答申になっている。定期演奏会をしようとなれば、楽団とかなり深い付き合いにならないといただけない。そのためには頑張って集客もし、オーケストラとどう一緒にやってくるかを考えていくかを考えなければならない。上田市で常設オーケストラの定期演奏会を聴くか、群響は近いから高崎で聴けばいいとなればそれでもいい。どちらを選択するかの問題。

(委員) すごく難しい判断があると思う。固定的にオーケストラが毎年来てくれて、触れ合って、集客がなかなか伸びないが、やり続ける判断が必要なのか。やめることは簡単。500万から1千万円近く予算が助かると言えば助かる。でも一回途切れてしまうと、せっかく積み上げてきたものが崩れてしまう。続けるなら続けるで、どうやってお客様を呼ぶ手立てを考えるかということだと思う。上田といえば音楽だと、他でも聞こえてくるので音楽は大事にしてほしい。そこの歯の食いしばり方は次の5年は求められるのではないか。そこが一つの大きな課題。

(委員) 今の点はもう少し委員会で議論が必要だと思う。経済波及効果等にも関連するが、地元にお金がいなくて直接東京にお金が行くことがある。それはなぜかという地元を受け皿がないから仕方なく行っているのだと思う。逆に言うと受け皿のないものをわざわざ東京にお金を落として引っ張ってこなければいけないのか、もっと地元でできるものを地域密着、地

元でできるものという考え方もある。また、地元の受け皿を育てることはできないのか、その館の役割ということも出ると思う。今の話と極めて密接な関連で、もっと議論を深めたいし、大事なポイントだと思う。

(事務局) そのとおりだと思う。育てるということは教育と同じなので、時間とお金が相当かかる。数字的なことにおいてもその判断が必要。公演やコンサートの数倍のお金が掛かってくる。上田はそのコストをかけてでも育てようという判断ならば移行していくことになる。

(委員) 地域密着の関連の中でどう判断していくかということ。

(事務局) それに関しては、最初の5年間10年間というビジョンの中で、このことの議論ができるためのこれまでの公演でもあった。ゼロの状態でどちらを取るかといっても誰もわからないので、様々な公演を行ってきて改めてそのための議論をしていきたい。

(委員) それは総合判断になる。それと今の東京にお金が落ちているということは報告書に出ていない。

(委員) ランチタイムやワンコインコンサートの集客はどうか。

(事務局) 順調。

(委員) ということは潜在的なニーズがあるはずで、それをオーケストラにどう結び付けるかということ。それがちょっと高い値段になると来ないのは全国どこも課題だと思う。

(事務局) 次回以降にまた議論したい。

(2) 人材育成、普及啓発事業について

- ・資料に沿い、久保田副館長から概要を説明
- ・以降、協議

(委員) 総じて課題だと思うのは内容の多様性、特に鑑賞事業で日本の伝統芸能とか、伝統文化、箏曲とか三曲といったものがごくわずかしがなく、ほとんど洋楽が主になっている。内容の多様性、特に日本の伝統芸能・伝統文化、さらには地域の伝統文化が一番課題だと思う。

(事務局) 日本の公共ホールの公演の8割はいわゆる現代芸術に偏っている。残りの2割がいわゆる古典になっている。これをこれから先どうしてゆくのか日本全体の問題として取り上げていく問題。阪神淡路大震災の経験を学び、東日本大震災では地域の伝統芸能を守ろうという動きがすごくあったが、実際に守れたのは、有名で大きなものが中心で、小さなものはなかなか手が伸ばせられなかったということがまた大きな反省点となっている。地域の公共ホールが伝統芸能を守るといことは、その地域でやっている伝統芸能をホールでやってくださいといっても、いやだという人もたくさんいるので、公演をホールですということではなく、何らかの形で手をつないでおくことは今後の公共ホールの重要な役割の一つだと開館時から考えている。ただ、それは時間をかけて行うべきことなので、5年から10年ホールが成熟するのを待ちたいという気持ちがあり、委員が言われたような点については今後の一つの運営の方向性としてあると考えている。

(委員) 音楽教育が洋楽中心の音楽教育になっているが、せっかく日本の箏や三味線や尺八などがあるにもかかわらず、それに触れる機会が全くない状況はむしろこうした地域の館でフォローしてほしい。

(事務局) 学校に行ってもアウトリーチができる奏者が日本にはとても少なく、学校教育の中で邦楽を行っていくというのは数年前にあったが、誰が教えるかということが大きな課題で、きちんと学校教育に入っていけるアーティストが少なく、そこから育てようと国の中でも動いている。この先そういう展開は全国各地でしていかななくてはならない。

(委員) もちろんレベルの幅はあると思うが、邦楽でも地域の中で活躍している方はたくさんいるし、団体もあるので連携は取れるの可能性はある。

(事務局) きちんとした形で学校に入っていけるように一緒に学んでいければと考えている。

(委員) この人数でよくこれだけの事業をやっているなどと思う。学校に入っていくのはあらゆる意味で非常に手間暇がかかるので、この辺りも歯の食いしばりどころ。

(事務局) 公演事業はある程度制作業務が定型化されているが、学校に行くことに関しては公演の

数倍の労力がかかる。そこをどうするのかというのはやはり考えていかないといけない。

(委員) 大ホールの集客の良い演目はもう少しやっても良いと思う。じゃあ何が入るのかという問題になる。松本との競争もあり色々工夫をしているのはわかるが。

(事務局) 今地方公演を行うことのできるホールがある程度決まってきた。カンパニーがやりやすいということもあるし、お客様がきちんと入る演目の数が減ってきていて、なおかつ東京中心で公演が終わってしまう。

(委員) 資料を作成した立場から捕捉したいが、報告書をまとめるうえで一番大変だったのが事業の整理を行うことだった。一人のアーティストで複数の事業を行なっているの、どの事業をどこに仕分けるかという判断が大変難しい。逆に言うとそれがサントミュージゼの戦略ということになる、たとえば報告書の 5P6P の芸術家ふれあい事業があるがホールでの事業と学校に行くアーティストが同じアーティストで事業と事業が連携して戦略的に行われている印象。オーケストラも入場者率が低いものもあるが、単に公演を行うだけでなくアナリーゼワークショップなど一粒で2度3度おいしいような工夫をしている。これは全国の他の館ではあまり見られない。演劇・ダンスに関して、レジデントカンパニーということで2年間地域に深く入って、その1年目に市民参加公演を行い、2年目に地域を題材とした本格的な制作を行っているということで構造化されている。こういった多様な事業を行いなおかつ本数が多く、工夫された事業の組み立てになっている。

(委員) よくここまで若手の良いメンバーを持ってきていると感心する。東京でもここまでのラインナップはできない。これはうらやましい。

(委員) ここでレジデントのアーティストやカンパニーがいてクリエーションを行っていることがすごく重要、そこに地元の高校生が入ってきたりと、非常によくやっていると思う。すみだトリフォニーホールも新日本フィルがフランチイズでいてアウトリーチも行っている、クラシック音楽人口が減る状況の中、いろんな創意工夫を30年にわたり行っている、外に出ていくことは本当に労力がある、かつすみだの場合はジュニアオーケストラも持っていて、ケアがすごく大変なところがある。そこに地域の方々に運営面でのサポートがお願いできないのかとずっと言われながらなかなか踏み込めていない。先ほどサポーターのかかわり方とアウトリーチの運営面でのことだが、大事にしていかなければいけないことがたくさんあると思うが、何か地域の方に一緒にいただけるような工夫ができないかと思う。館だけでやろうすると、あれもこれもやらなければならないので、将来的に考えていくということもある。

(委員) 高校総文祭が去年行われ、3日間参加した。毎日大ホールが満席で全国12校の関係者が沢山来てそのたび入れ替わっていく。北海道から九州までのいろいろな方がたくさん来て、演劇もすごく盛り上がっていた。そういったことは評価の数字に表せないことだが、市外県外から多くの集客があるというようなことはぜひ評価に加えてほしい。

(事務局) 高校総文祭は全国的に高校の演劇部は上田という街を知る機会になった。翌年には劇作家大会もあり、日本の演劇をやっている人の大半は上田という街を知った。ブランディングは数字には出ないし、文章にもなかなかできなくて、プライスレスといったところだが、それをプライスレスにしたままではだめだと思っている。

(委員) 劇作家大会も教育関係者に是非聞いてもらいたいような講演会などもあって、内容の濃い大会だったと思う。

(事務局) 先ほど委員からもあったが、今までの取り組みなどで、クラシック音楽のアーティストの方々も、上田といたらすぐわかるようになってきている。いろいろなアーティストからの企画提案がありそれを止めることのほうが大変になってきている。

(委員) 評価の話で、企業メセナ協議会ではエピソード評価やストーリー評価といったものを行っている。メセナ協議会も評価を知りたいというところがあり。定量的なものでなく、定性的なものだが、ここで何が起こったかというエピソードを積み重ねていくということを大事にして行っている。今の話などはまさしくそうだと思うし、ここができたことによるビフォーアフターがどう違うのかをエピソードで把握しておくというのは重要なことでは

ないか。

(事務局) アウトカムをきちんととらえていくことをこれからはしていかなないといけない。

・久保田副館長より報告書第3章を説明。

(委員) 先日芸術家ふれあい事業のピアニストによるアウトリーチを視察したが、演奏はもちろん素晴らしいが、演奏後、ピアニストが子供たちに感想を聴いたら、一人の子供が、財布を落とした感覚と感想を言った。ピアニストは曲としては悲しい曲をその子はそうユニークに表現したと、とても上手にフォローしていた、発言した子はにこにこしているし、ほかの子供たちも思ったことを自由に言っているんだと感じたと思う。こういったことも評価として出てこないところだが、本当に事業を続けてほしいと思う。

(事務局) 本当はそういう子供たちを経年で追いつけていかなないといけないと思うが、なかなかそこまではできていない。

(委員) 評価の良い意見はもう結構だと思うので発言しない。39ページの学生とか若者の率が極めて低い。これは鑑賞している人数が少ないのかアンケートの回答者数が少ないのか、いずれにせよ若者の構成割合が極めて少ないが。

(事務局) 両方の理由。

(委員) ということは一つの課題だろうと思う。少数意見かもしれないが利用者が固定化しているのではないかと、事業の実施時期や募集のタイミングがという意見については館としてはどのように考えるか。

(事務局) 利用者の固定化は貸館などでも多く見られ、課題の一つと考えている。

この後の検討事項になるかと思うが、使用料の金額と、近隣他館と比べたスタッフ特にテクニカルスタッフの充実がどうしても稼働率の高さと利用者の固定化を生んでいる理由の一つになっている。各事業の参加者募集については、なるべく仕事や学業に差し支えの無いような形で進めたいが、関係するアーティストの日程と1年通してみた事業全体の組み立ての中でのスケジューリングになるので、どうしても不利な時期の募集ということもあるが、何とか改善できればと思う。

(委員) 公民館や、近隣の同様の施設との連携という構想もあるが、なかなかできていない部分だと思う、ましてや公民館事業とこっちの区分けというのは難しい問題だがあるにはある。市民の皆さんが良い所で利用したいのは当然だが、それはどうなのかということも赤裸々な議論としてはあって当然、その辺も行政として公民館事業なのかどうか後日議論できればと思う。

(事務局) 長野県は公民館が強いということも承知している。公民館事業の中でホールと調整していかなければいけないと思っている。今の連携は私たちがコンサートに出かけていき公民館を使わせていただいている。普段公民館に来ない人たちを公民館に来ていただくというような連携でしかない。

(委員) それは多分に利用料との関係になる。利用料を上げればハードルが高くなるのは事実だからその辺の線引きができる可能性はある。いろいろな反対もあるのはわかるがそれも区分けする方法としてはあるかもしれない。その議論が重要。

(委員) 年齢層はどこでもこういう傾向。若者が来ない。50代60代のお金を持ってらっしゃる層、それから女性。若い子たちは本当に難しい。

(事務局) 10年ぐらい前からなるが、昔は学生料金だったが、いまはほとんどがアンダー25歳、そのあたりが一番お金を持っていない。では入場料を下げればいいのか、という問題でもないという気がする。逆にもっとお客さんをとということになると、今度は富裕層にだけ情報を出せばいいのかということにマーケティングとしてはなる。こういう問題もあり、若い世代に来てもらうにはかなり汗をかかないといけないと思っている。

(委員) 先ほどの統計は公園事業に関しての統計だが、14ページに人材育成・普及啓発という参加者人数の欄があり4年間で33,000人、これは20代の若者はいないが、小学生が入っている、全部の若者に向けてではないが、小学生には相当のケアをしている、卒業後、若い世代としてチケットを買う将来の観客を育てるという意味もある。5年10年た

って、この公演の年齢層がどう変わるかを調査してみたい。57ページの普及啓発で子供たちにいろいろなワークショップをやって、先生がいろいろ観察をしたエピソードで、普段国語や算数の事業で、ゴールになかなか近づけず委縮している子供たちが真っ先にのびのび動き出し、いつも国語や算数で100点をとる子供たちがそれに影響されるという状況があった。いつも100点を取っている子たちは壁際でじっとして動けない。というエピソードや、先生自身がアーティストのアウトリーチを見て自らの教え方にすごく影響を受けている。子供たちが影響を受けるというのもあるが、これをやり続けていくと上田の学校の教育の質が先生自身も含めて変わってくる可能性がある。成果が出てくるのは1年2年ではないが、5年10年続けていったときにはあると思う。海外の調査でもやったほうが成績は良くなるという調査も出ているぐらいなので。

(事務局) 来年度から小学校の学習指導要領が変わりアクティブラーニングというのが入ることになっているが、先生方はどうしていいのかわからなくなっている。もう一つは大学入試要項が変わり、勉強だけではないという方向に今行っている。上田の小学校の先生が相当理解してくれてきているというのはこの5年間で相当ある。そうするとこれをやっていない地域とくらべたら先生方が柔軟に受け入れられる可能性があると思っている。

若い世代がタックスパイヤーになり、劇場に来る世代になるまで上田に引き留めるといふ施策を作らないとこれは文化だけではどうにもならないということがあり、そこはプロデューサーが中心になり、文化芸術の力と都市というものをどう結びつけるのかを他部局とも一緒に続けていければと思っている。

(委員) 前回定量的な評価のことを申し上げたときに、いろいろな委員から、将来の投資なので今から数字はわからないといわれた。それでは、現在のことをどう評価するかをどなたか説明していただきたい。現在というのはおそらく過去10年とか、15年まえの投資の結果としてなっていると思うが、今の状況をどう評価するのか、その辺がないと、言い訳になってはいけない、先送りになってもいけない、現状を過去の投資の結果としてどう定性的にするか、どなたかわかりやすく説明していただければありがたい。

(事務局) 上田だけでなく、美術館も含めた文化ととらえ、全国的にこのレベルの施設を運営している町が、日本の全体としてどうかということも一度出しえてみたい。ものすごく定説的な話になってしまう。

(委員) せっかく投資した人材を引き留めるところで、飯田市で人形劇フェスティバルをずっと20何年やっている。町中を活用してやっているので子供のころからボランティアで参加している。そうするとその時が来ると東京に出ていた学生が帰ってきてまたボランティアをやっているという現状がある。これは長年の蓄積の成果だと感じる。帰ってくるきっかけに長くやっているとすることもある。

(事務局) ここはまだ5年間だが、高校生の時に事業と一緒にやってくれた子供たちはいま大学生になっていて、何かあると彼らが必ず戻ってきて手伝ってくれるというのがある。それを年数かけていくとすごく大きな輪になるだろうという実感はある。

(委員) すみだトリフォニーホールは新成人と移住者に1回ずつだご招待をしている。それがいいきっかけになって足を運んでいるということもある。

(委員) 若い人がこの町で子育てをしたいと思うかどうかとも大きい。いろいろな事業をやっているこの館があることがすごく大きいというようになれば。

(委員) 誰でもコンサートというのをやっていて、ジュニアオケが舞台に立ち、来る方はお子さん連れでも本当に誰でもともう何年もやっているが満席になる。その親子でというのも小ホールでやると満席。お母さんがお子さんを連れてホールになかなか来れない状況があるのですごくありがたいと言われる。そういう面でも暮らしやすさにつながる。

(事務局) 長時間にわたる検証、ご議論に感謝申し上げます。議論の中で出た資料等を示しながら館の運営がどうあるべきか議論を年内あと2回、年明けに1回程度予定しているので引き続きよろしくごお願い申し上げます。

